

### 3. カーネーション

・殺菌剤

FRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M3	エムダイファー水和剤	散布	発病初期	8回以内	
32	タチガレン液剤	土壌灌注	定植時及び活着後	3回以内	
M5	ダコニール1000	散布	発病前～発病初期	6回以内	花き類・観葉植物(ばら、きく、チューリップ、ゆり、りんどうを除く)

・殺菌剤 (参考農薬)

FRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	サンヨール	散布	発生初期	8回以内	花き類・観葉植物(きく、ばら、ペチュニア、スターチス、プリムラ、ハンジューを除く)
19	ポリオキシシンAL水溶剤	散布	発病初期	8回以内	

・殺虫剤

IRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	アドマイヤーフロアブル	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きくを除く)
6	アフーム乳剤	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物
20	カネマイトフロアブル	散布	-	1回	
21	ダニトロンフロアブル	散布	発生初期	1回	花き類・観葉植物
-	粘着くん液剤	散布	発生初期	-	花き類・観葉植物
21	ピラニカEW	散布	発生初期	1回	
2	ペンタック水和剤	散布	-	-	カーネーション(施設栽培)

・殺虫剤 (参考農薬)

IRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
21	サンマイトフロアブル	散布	-	2回以内	

- 注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。
- 注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける(「薬剤抵抗性管理」参照)。
- 注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。
- 注4) 蚕毒・魚毒については、「28. 花き類の総括注意」も参照する。

病害虫名 (F : 菌類病、B : 細菌病、V : ウイルス病、O : その他の病原体)

病害虫名	防除時期	防除方法	注意事項
萎凋病 (F)	植付前	1. 発病ほ場では、土壌消毒を徹底する。 2. 自家育苗では挿し芽中の点検をこまめに行い、発病株を認めた場合は育苗箱ごと処分し、定植には必ず無病苗を使用する。	1. 本病は土壌伝染性の難防除病害である
立枯病 (F)	生育期間	1. 栽培中(定植時・活着時)に発病した場合は、発病株やその周囲の株を抜き取り、タチガレン液剤 500 倍液を㎡当り 3ℓ灌注処理する。	
さび病 (F)	育苗期間 ほ場期間	1. 育苗中に発病を見たら、直ちに罹病株を除去し、薬剤を散布する。 2. 栽培期間は、葉に発生が限られている内に罹病葉を除去し速やかに薬剤散布を行う。	1. 連作は避ける。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
		3. エムダイファー水和剤 600 倍液を 7 日おきに散布する。	
斑点病 (F)	育苗期間 ほ場期間	1. 栽培期間は発生が葉に限られている内に、罹病葉を除去し速やかに薬剤散布を行う。 2. ダコニール 1000 の 1,000 倍液を 7 日おきに散布する。 [参考農薬] 1. ポリオキシシン AL 水溶剤 2,500~5,000 倍液を散布する。	1. ハウス内は過湿にならないように注意する。
灰色かび病 (F)	生育期間	1. 施設内が過湿にならないよう密植を避け、換気を図る。 2. 株元の枯死葉は、伝染源になるので除去する。 3. 発病を見たら、直ちに罹病株を抜き取り、薬剤を散布する。 [参考農薬] 1. サンヨール 500 倍液を散布する。	
萎凋細菌病 (B)	育苗期間 ほ場期間	1. 自家育苗では、挿し芽中の点検をこまめに行い、発病株を認めた場合は育苗箱ごと処分し、定植には必ず無病苗を使用する。	
ハダニ類	5月～9月	1. 粘着くん液剤 100 倍液、ペンタック水和剤、ピラニカ EW の 1,000 倍液、カネマイトフロアブル 1,500 倍液、ダニトロンフロアブル 2,000 倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. サンマイトフロアブル 1,000 倍液を散布する。	1. 高温乾燥時に発生が多い。 2. 粘着くんは、ハダニの気門を塞ぎ、窒息させて殺虫するので、虫体に直接かかるよう寄生部を中心に十分量を散布する。残効性を有さないので、5～7日間隔で2～3回連続散布する。 3. ダニトロン、サンマイトは魚毒に注意する。
オオタバコガ	生育期間	1. LED防除器(レピガード®)、又は黄色灯により産卵を抑制する。 [方法] (1)点灯期間はオオタバコガの発生開始期～終了期までとし、毎日日没から日の出まで点灯する。 (2)照度はカーネーションの蕾の位置で1ルクス以上とする。 2. アファーム乳剤 1,000 倍液を散布する。	1. 黄色光はオオタバコガの産卵を抑制するが、殺虫効果はない。 2. 他害虫が発生した場合は薬剤で防除する。 3. アファームは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
タバコガ	着 蕾 期 (産卵、 孵化期)	1. 施設開口部を防虫ネットで覆うと、成虫の侵入を軽減できる。	1. 殺虫剤の散布は虫齢が進んでからでは効果が劣るので、産卵、孵化期に行う。
クローバーシストセンチュウ	植 付 前	1. 土壌線虫の項を参照する。	
アブラムシ類	生 育 期 間	1. アドマイヤーフロアブル 2,000 倍液を散布する。	1. アドマイヤーは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。

#### 4. ゆり

・殺菌剤

FRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M5	ダコニール1000	散布	発病前～発病初期	6回以内	
1	トップジンM水和剤	散布	-	5回以内	
19	ポリオキシリンAL水溶剤	散布	発病初期	8回以内	

・殺菌剤（参考農薬）

FRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
9	フルピカフロアブル	散布	発病初期	5回以内	

・殺虫剤

IRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	アドマイヤーフロアブル	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きくを除く)
1	オルトラン水和剤	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物
1	マラソン乳剤	散布	発生初期	6回以内	花き類・観葉植物

・殺虫剤（参考農薬）

IRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
1	オルトラン粒剤	株元散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きく、宿根スターチス、カーネーション、アリウム、たदैいを除く)
4	ベストガード粒剤	生育期株元散布	発生初期	4回以内	花き類・観葉植物(きく、きんせんかを除く)
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(ストック、りんどうを除く)

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決まっているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

注4) 蚕毒・魚毒については、「28. 花き類の総括注意」も参照する。

病害虫名（F：菌類病、B：細菌病、V：ウイルス病、O：その他の病原体）

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
疫 病 (F)		1. 連作をできる限り避ける。 2. 前作の発病株残さは、ほ場外に埋却する。	1. 土壌が過湿になり過ぎないように注意する。
葉 枯 病 (F)	5月～10月	1. 施設内が過湿にならないよう密植を避け、換気する。 2. 発病を見たら、直ちに罹病部を除去し、薬剤を散布する。 3. ダコニール1000の1,000倍液、トップジンM水和剤1,500倍液、ポリオキシンAL水溶剤2,500倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. フルピカフロアブル2,000倍液を散布する。	1. 薬剤耐性菌の出現を避けるため、同一系統剤を連用せず、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
ウイルス性 病害 (V)	生 育 期 間	1. ウイルス感染苗による伝播は広範囲に及ぶため、ウイルスフリー苗を用いる。 2. アブラムシ類防除のため、アブラムシ類の項、又は「25.花き類・観葉植物」の項を参考に、定期的に殺虫剤を散布する。 3. ハウス周辺の雑草は伝染源になるので除草する。 4. 罹病株から順次、二次伝染が起こるので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外に埋却する。	1. 育苗時の感染に厳重注意する。 2. ゆりに発生している県内の主要なウイルスは、CMV、LSV、LMOVである。
アブラムシ類 (ウイルス 媒介)	8月～10月	1. オルトラン水和剤1,000倍液、アドマイヤーフロアブル、マラソン乳剤の2,000倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. オルトラン粒剤を10a当り3～6kg、又はベストガード粒剤を1株当り1～2gを株元散布する。 2. モスピラン顆粒水溶剤4,000倍液を散布する。	1. ウイルス発病株は抜き取る。 2. アドマイヤー、モスピランは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。
ネ ダ ニ	定 植 前	1. 球根は45℃の温湯に60分間浸漬する。	1. 常発地では連作しない。 2. 定植に際し、堆肥と球根が接触しないように注意する。
コウモリガ	生 育 期 間	1. 被害株は見つけ次第取り除き、食入幼虫を捕殺する	